

週日の説教

金 大烈 神父 2010年12月3日(金)

《神様が一番望んでいること》

主の平和

皆様に機会を差し上げますので、「おめでとう」とおっしゃって下さい。(笑)

「おめでとうございます!」「ありがとうございます。」(今日は、フランシスコ・サベリオ 金 大烈 司祭の霊名のお祝い日です。)

考えてみたら日本では「ザビエル」、「サベリオ」とも言われますね。現代スペイン語ではハビエル。そしてイタリア語ではサベリオ。とにかく日本での司牧が7年になりました。

皆様は、私よりも詳しいと思いますが、フランシスコ・ザビエルはスペインのハビエルという家門に生まれます。だからフランシスコ・ハビエルと言うのです。アッシジのフランシスコはアッシジで生まれました。フランシスコ・サレジオもありますね。同じフランシスコという名前を持っている人が、地方とか家門の名前をつけて区別しています。

フランシスコ・ザビエルは1506年にスペインに生まれて1537年にイエズス会の司祭とし叙階されます。インドで宣教活動し日本に来ました。日本には1549年の聖母被昇天の祝日に着きました。そして1552年に亡くなります。実際に日本で司牧したのは3年になりません。しかし彼によって日本に福音の種がまかれ、今のカトリックの礎が出来ました。

彼の人生を考えてみますと、やはり今日の第1朗読(1コリント9・16-19、22-23)で、使徒パウロがコリントへの手紙で話されたものと同じ気持ちだったのでしょうか。『わたしが福音を告げ知らせても、それは私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。』この言葉の一番のポイントは“そうせずにはいられない”という言葉です。そして最後に『それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。』これは“やらなければならない!”という熱い気持ちだったのでしょうか。ですから自分の仕事を離れて、色々な難しさ苦しみが待っているのを分かっているながら、命の危険さえ顧みず日本に来て、それから中国まで行こうとしたわけです。その中国に渡る時にサンチャン(上川)という島で風土病でしょうかその地域の病気にかかって亡くなりました。

ザビエルのことを考えてみますと、司牧した3年間は日本語を学ぶことはなく殆ど使えなかったでしょう。記録によりますと、一人の通訳者が助けたと伝わっています。面白いのはその時代、彼はスペイン語とラテン語を使ったそうですが、その当時、日本ではスペイン語とかラテン語を分かる人はいなかったでしょう。その通訳者も日本で人を殺してしまい日本から逃げる時にポルトガル船に助けられてインドまで行った人でした。インドで宣教師に出会って、そこで彼は悔い改めて洗礼を受け、カトリック信者になったわけです。その人がフランシスコ・ザビエルを日本まで連れて来ることになったのです。その時から彼は通訳したと思いますがそんなに上手くは出来なかったでしょう。昔の日

本語は難しいですよ。日本人同士でも解らない日本語が結構あったのではないですか。

そういう時代、色々な不便さを感じながらも宣教活動をしたときに、今日の福音でおっしゃったように、考えられないような素晴らしいはっきりとした印が現れます。数えきれないような人々が信者になるのです。これはただ彼の力によるものではないでしょう。ザビエルという宣教師一人の能力ではないと思います。その人を道具にして聖霊が働いたのでしょう。そういうことを見て色々な人々が知らない力に引っ張られてカトリック信者になったのでしょう。

色々な国を見ても福音が伝えられる時、大体がこのようなプロセスを通ります。常識的に論理的にそれが出来るかどうか何も解らない、何も持っていない、どこを見ても不利な条件で、自分の体を不自由にします。しかしそこから素晴らしい実りが得られ奇跡と言えるくらいのことが起こります。

さあ、今の時代の宣教師である私が、冷静に考えてみても、このような状況下で「宣教師として働くことが出来るか」と問われれば、率直に言って自信がありません。自分の能力では絶対出来ることではありません。もちろん、全て神様の業と信じながらも、司祭にとって難しさは全部違います。そして時代背景によっては、もっとし易く受け入れやすい人々の状況だったかも知れません。色々な面で苦しい時代だったから。今は何でも持っています。何か持っていない物があればすぐに手に握れる時代に生きています。フランシスコ・ザビエルが生きた時代よりも、現代の宣教師の方がもっと難しい条件に囲まれているかも知れません。私が冗談で言うのですが、ある意味でアフリカや南米で宣教する方が、もっとやりがいを感じ効果がすぐに目に入るのではないかと。なぜならいわゆる高級社会は、やはりもっと福音宣教しにくい条件であると思います。

皆様、昔戦争後、若者たちは教会に集まって遊んだのでしょう。教会に来たら嬉しかったのでしょう。同じ立場にある、色々な難しさに囲まれている青年たちが集まって、西洋の司祭と話し合い、色々なことを聞いたり、分かち合ったり、そういうこと自体が幸せを感じさせたのでしょう。今の青年たちはどうですか。何でも出来ますよね。そのような時代的な違いもあるでしょう。ある意味で、皆様の神父である私はもっと孤独で宣教しているかも知れませんので励まして下さい。(笑)

さあ面白い話をします。アメリカは日本のように「県」で分けられているのではなくて「州」に分けられていますよね。マサチューセッツ州があります。そこで、アメリカ全体で一番初めに視覚障害者、いわゆる目の感覚を失って何も見えないその人たちの施設を建てました。施設を建設するその委員会で、何とかして経費を減らしながらも立派な建物を作りましょう。もっと効果的な建物を作りましょうということになりました。そして議論の結果、その建物の窓はいらないのではないかと。彼らには無駄なのではないかと結論づけられました。本来ならば建築法的にも沢山の窓を作らなければならないのですが、そのお金を他の所に使いましょうという結論が出されたわけです。そして、窓なしに換気装置とか冷暖房とかそういった設備をより整えることにしました。

それが全部でき上ってから1か月もたたずに、原因も分からずそこにいる一人一人が病気になって

しまいました。そして2か月経って二人の人が死亡してしまいます。これはどういうことかと専門家の人々が集まってその理由を探します。しかし、原因は分からなかったのです。ただ心理学の専門家が、これは窓がないせいでしょう。彼らには窓事態は全然見えないけれども、あそこに窓があってそこから光が注ぐのだ。そして、窓という概念はすでに頭の中にあるのでしょうか。光が全然入らないところに囲まれて、人々は何の意味も見出せなくて、やる気を失ってしまったのでしょうかという意見を出しました。結局窓を作り直しました。そしてその時から人々が元気になって、自分の生活をしたという事実が記録に残っています。

さあ、私達が生きているこの世はどうでしょうか。イエス様が見えますか。見えないですね。見えないと言いながら、触れないと言いながら、カトリック信者で信仰を持っている人でも遠ざかる人々が結構います。見えなくても、触れなくてもイエスという神様の存在が、自分の中にいないという気持ちになったら私達は死んでしまいます。必ず病気になってしまいます。私達が忘れてはいけないことは、具体的に私達の祈りが、かなえられないという気持ちになっても、無意識の中でも、イエス様は存在します。“恵み”それさえあきらめてしまうと私達は絶対的な希望を失うことになります。イエス様は必要です。神様は私達の生き方に必ず必要です。

さあ、この世の中はどうですか。この世界にはイエス様を王として知らされた御国、神様の御旨を知らない人々が沢山いるでしょう。おそらく皆様の家庭の中にもいらっしゃるでしょう。その方々に、本当にその人々が救われることを少しでも望んでいるのなら手を伸ばして下さい。

もう一回使途パウロの話を心に刻みましょう。『福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないからです。それはわたしが福音に共にあずかる者となるためです。』

皆様、福音はある意味で告げ知らせてもいい、しなくてもいいという問題ではなく条件です。神様に会う、神様を体験するための条件です。46歳の短い人生を終えたフランシスコ・ザビエル。彼の人生は社会的な論理によると、本当にもったいない無駄な人生だったかも知れません。しかし、その種は育ち実り結ばれました。ですから、私達も小さい振る舞い、小さい親切によって福音を伝えることが出来ることを意識しましょう。

皆様、福音を述べ伝えることは、宿題や使命のようなやさしいものではありません。“神様からの絶対的な命令です。” “神様が一番望んでいらっしゃることです。” という意味で私達は、自分が立っているところから少しでも宣教師としての意識を持つように頑張りましょう。

ありがとうございました。

病者の塗油、按手 をする前に

私は今日、ミサが始まる前に傷を癒されるように願いましょうと話しましたね。皆様、何回も繰り返して申し上げたのですが、今皆様の性格自体が、傷の結果だと思って下さい。その傷を上手く乗り越えられたら、今よりもっと寛大な心の持ち主になったでしょう。もしそれを乗り越えられずに、痛

みとして持っている、その痛みは必ず自分だけの痛みではなくて周りに痛みを与えてしまいます。何があっても素直にイエス様に心を向ける。素直に人々の立場を理解しようとする。自然にそのような心の持ち主になるには、何よりも心の癒しが必要です。特に心の中の傷、拒まないで下さい。皆さんが持っています。私も持っています。死ぬ時までその傷を持って行きます。

例えば、北朝鮮の金正日。その人は悪人とかきちがいとか色々言われていますが彼も傷だらけでしょう。だから正しく考えることが出来なくなってしまったのだと思います。この世の中には結構そういう人がいます。そのような人々がもし権力振るう者になったらこれは止められません。だから信者の私達も、そういう面で注意を払わなければならないと思います。本当に自分の心の中にある傷、その傷が、皆様自身を見る鏡になることを意識しましょう。今日病者の秘跡、按手によって癒しを願います。強く願います。そして、その実りは神様が下さると信じながら与りましょう。